

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0572207520		
法人名	有限会社 熊谷ケア企画		
事業所名	グループホームあぜみち		
所在地	秋田県能代市二ツ井町飛根字羽立95-1		
自己評価作成日	令和2年9月10日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 秋田県社会福祉事業団		
所在地	秋田市御所野下堤五丁目1番地の1		
訪問調査日	令和2年10月7日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

人が生まれ死ぬまでの間に介護を受ける時期はわずかである。認知症であっても、一日の中で症状が発生するのもわずかな時間である。だからこそ、認知症ケアを重要視するよりも人としての当たり前の生活と自然な形の老化現象を認めるべきだと考えている。私達は、その人が望む生活、そしてその人なりの時間の過ごし方を大切にしている。毎日が違う時間の過ごし方になるが、本人が「これで良い」と感じているのであれば、楽しんでいても、ボーッと過ごしていても、怒っていても、その人の生き方であると認識することが、尊厳を守ることになるのではないかと考えている。日々の生活の中での関わりから得られるものは多く、その全てが自分のこれからの生きる糧となるものだと感謝し、前向きな姿勢で取り組んでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

地区の会館を会場にホーム主催のカフェ「癒し処 巴」を開催し、高齢者の不安解消に大きく貢献しており、避難訓練時の地域住民による避難誘導の協力につながっている。鳥子舞で有名な、県指定無形民俗文化財である羽立大神楽(はだちだいかぐら)がホームの敷地に巡行してくれている。また、隣接する事業所の駐車場が盆踊りの会場にもなっており、ホーム自体も地域から見守られている存在と言える。毎月利用料支払いのため、家族が訪問してくれるが、どの家族からも話題が絶えないとのこと。各家族と十分にコミュニケーションが確立しており、意見、要望が出しやすい環境にある。施設長が現場のシフトに入ること、実情を詳細に把握していることから、様々な気づきや提案はむしろ施設長から出されることが多い。普段の業務の中で何でも言えるアットホームな環境にある。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～53で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
54	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	61	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらい 3. 家族の1/3くらい 4. ほとんどできていない
55	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	62	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
56	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	63	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
57	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	64	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
58	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
59	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
60	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者と管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員が意識できるよう、目につく場所にスタッフ理念を掲示し、普段の会議の場でも話題にあげながら理念の共有に努めている。	開設時に作成したホームの理念及び介護理念がホームのパンフレットに紹介されている他、居間入口上段の誰からも見やすい位置に掲示されている。グループホームはそもそもどうあるべきかを深く考察した様子が推測される。「慣れ親しんだ今までの生活を出来るだけ変えないことが、五感の感覚を失わないことにつながる。ホームという集団生活の場は、一緒に生きていく場であり、それをスタッフが支援する。」との管理者の言葉が印象的であった。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	例年、地域行事への積極的な参加を行っているが、コロナの影響で今年度中々実施できていない現状です。毎月第3土曜日に地域住民との交流の場として開催していた「癒し処 巴」も、現在は休止となっています。	地区の羽立会館を会場にホーム主催のカフェ「癒し処 巴」を開催し、地区の高齢者の不安解消に大きく貢献しており、避難訓練時の地域住民による避難誘導の協力につながっている。烏子舞で有名な、県指定無形民俗文化財である羽立大神楽(はだちだいかぐら)がホームの敷地に巡行してくれるとのこと。隣接する事業所の駐車場が盆踊りの会場にもなっており、ホーム自体も地域から見守られている存在と言える。	
3		○事業所の力を活かした地域とのつながり 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に伝え、地域貢献している	サポーター養成講座の講師を行ったり、「癒し処 巴」にて地域の方々へ伝えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議では、ホームの取り組みやサービス情報の発信を行いながら情報交換に努めている。認知症への理解を促すとともに、地域と連携してできることについても話し合っている。(現在はコロナの影響で休止中)	市担当者、包括支援センター、区長、利用者代表、家族代表が委員として参加している。参加した委員から意見が出にくい現状であったことから、ホーム側より地区の現状や協力態勢等について具体的に投げかけることで、より意見が出しやすいよう改善している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市町村担当者和との情報交換を行い、協力体制を整えている。	市担当者、包括支援センターが運営推進会議に委員として参加しており、ホームの実情を詳細に理解している他、必要に応じ、情報交換を行い、協力関係を築くように取り組んでいる。生活保護担当者とは毎月連絡を取り合っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束マニュアルを会議の場で読み合わせるなど、身体拘束のないケアについて職員間で情報共有を行っている。	開設以来対象者は皆無。スタッフ全員が参加しての虐待・身体拘束解除についての会議を月1回開催し、全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解するよう取り組んでいる。玄関の施錠は21時～6時に限定している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	通常の業務で何が虐待につながるのかを話し合いながら防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	関係機関との情報交換や話し合いを持ち、活用できるよう支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用者及びその家族との話し合いを行うことができるよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常のコミュニケーションの中で、利用者及びその家族が気軽に自分の意見を言いやすい環境となるよう努めている。	毎月利用料支払いのため、家族が訪問してくれるが、どの家族からも話題が絶えないとのこと。遠方の1家族とは電話で情報交換し、丁寧な対応に努めており親身さが伝わっている。どの家族とも十分にコミュニケーションが確立しており、意見、要望が出しやすい環境にある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ケア会議の場面はもちろんのこと、普段のケアの中でも積極的に意見が言える環境を整え、運営に反映させている。	施設長が現場のシフトに入ることで、実情を詳細に把握してくれている。様々な気づきや提案はむしろ施設長から出されることが多い。普段の業務の中で何でも言えるアットホームな環境にある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、個々人の実績や勤務に対する姿勢を現場の中で把握し、それぞれが向上心を持って働けるような環境や条件の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、代表者自身や管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員に対し、積極的な研修への参加の機会を提供し、それぞれの成長へとつなげている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、代表者自身や管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	秋田県GH協議会、ほっとネットニツ井に属し、勉強会などを通じてネットワークを広げ、事業所全体の質の向上に努めている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の訪問を通じて、本人の想いに耳を傾け、安心して入所していただけるような関係性の構築に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の声を聞き取りし、利用者とともに家族にも安心していただけるような関係性の構築に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	すべての利用者と職員が、ともに助け合いながら生活していくものであると意識を持ち、関係づくりを行っている。		
18		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との関係性の中で、共に利用者を支えていくという協同意識を持ち、本人と家族の絆を保っていけるように協力している。		
19	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	かかりつけの病院はそのまま利用し、友人知人などの訪問や連絡も受け入れながら、入居前の関係性が途切れないよう配慮している。	近所の方が訪問してくれ利用者とは話したり、庭の花を頂いたりしている。かつて一緒に山に出かけていた友人が訪れ、春はワラビ、秋にはきのこを差し入れてくれることもある。	
20		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係を見守りながら、孤立してしまわないよう、職員が間に入る場面を見極めながら関係性の構築を行っている。		
21		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	必要に応じて支援している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
22	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の会話、行動、表情などから、本人の想いを感じ取り、職員間の情報共有として流し、実現できるよう努めている。	山菜のミズの皮むき、ご飯の支度等々、長年の習慣で行ってくれる利用者があり、それぞれの利用者がホームの生活を支えてくれている。踊りや唄の好きな方は、健康体操の音楽に合わせ、楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
23		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、生きがい、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、家族などから可能な限り情報を聞き出し、把握できるよう努めている。		
24		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員間の会話、申し送り、又は日常的な生活サイクルを観察し、利用者個々の特徴や現状を把握している。		
25	(10)	○チームでつくる介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケア会議や日常的な支援の中で、ケアのあり方をスタッフ間で話し合い実施している。また、家族の訪問の際には本人の現状を説明しながら意見交換を行っている。遠方の家族の場合は、電話連絡にて行いながら、現状に即した介護計画の作成に努めている。	利用者支援における会議及び日常業務内での検討内容について、記録の整理、整備をすることで、ケアプランの根拠を明確にするよう改善している。申し送り時のケアに係る様々な情報も、共有することで本人がより良く暮らすためのケアプランに活かしている。	
26		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録用紙を活用し、日々の変化を職員間で共有し、日々の業務に活かしている。		
27		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源の把握に努め、本人の心身の健康につながるものを活用できるよう支援している。		
28	(11)	○かかりつけ医、かかりつけ歯科医、かかりつけ薬局等の利用支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医、かかりつけ歯科医、かかりつけ薬局等と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所前からのかかりつけ医を継続して利用し、本人にとって適切な医療を提供できるよう支援している。	入居前の利用者毎のかかりつけ医を継続して利用している。緊急時における利用者への支援・診療は協力医療機関である能代厚生医療センターを利用できる体制にある。同じく協力医療機関として、移動車輛で訪問診療できる歯科医院は心強い。何でも気軽に相談できる薬局は、まさにホームのかかりつけ薬局といえる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職不在のため、医療機関との情報交換及び連携を密に行っている。		
30		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	日常的な医療機関との関係性の構築に努め、入退院時の情報交換も密に行っている。		
31	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所でできる限界と可能な部分を本人及び家族に説明するとともに、終末期ケアが必要となった場合を想定しながら関係機関との連携を図っている。	入居時に、看護師がいない現状に照らし、終末期ケアが必要となった場合には主治医等医療機関との連携を重視し、家族や他のサービス提供機関と協議の上、対応を進めていくことを説明し同意を得ている。	
32		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の実践訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救命講習や緊急時の訓練などを通して、常に緊急時を想定した話し合いを行っている。		
33	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の総合訓練を実施しているほか、緊急時を想定した話し合いを行うとともに、地域住民との連携も行っている。	ハザードマップ上、水害の可能性は極めて低く、二ツ井地区の水没の際も影響がなかった。夜間想定避難訓練には近隣の住民4名が駆けつけ、誘導や見守りを援助する態勢にある。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
34	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人権尊重及びプライバシー保護のマニュアルを作成し、普段のケア会議の場で声掛けの仕方を確認し合うなど、一人ひとりを尊重した対応を行っている。	排泄誘導の声掛けは周囲に聞こえないよう配慮している。居室に入る際はノックし、「洗濯物をもってきたのでお部屋に入りますよ」等、声掛けすることが定着している。退室の際は「ありがとうございました。」等、丁寧な言葉で対応する方針であるが、時には臨機応変に方言を交えるとのこと。同じ大館・能代地区でも若干方言が異なり、理解できないこともあると笑顔で紹介してくれた。大声は出さないことをモットーとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の想いを表現し、自己決定できるよう働きかけている。		
36		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	本人の日常的な動きを優先し、自分のペースで生活できるよう支援している。		
37		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節ごとの衣替えの際に、本人の好みに合った衣類を家族から持ってきてもらっている。また美容室を利用して散髪を行っているが、コロナの影響で行けず、現在は職員が散髪を行っている。		
38	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節に合わせた食材の使用、また行事に合わせた食事を通して、五感を通して季節や空気を感じてもらえるよう心がけている。また、畑でとれた食材の下準備を通して食に対する楽しみの意識を持ってもらうよう努めている。	施設長が畑を所有しており、じゃがいも、ネギ、里いも、長芋、ピーマン、ナス、枝豆、春菊、トマト等々、数多くの採れたての新鮮な野菜が食卓に並び、彩も工夫され、季節を食事から感じてもらうよう工夫されている。雑祭にはちらし寿司等々、月々の行事に合わせてメニューを取り入れている。	
39		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう状況を把握し、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの状態に合わせた栄養摂取及び水分確保に努めている。		
40		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、個々の状態に合わせた口腔ケアを行っている。		
41	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日々のチェック表を通して、個々の排泄パターンを把握し、個別の支援を行っている。	9名全員の水分補給等も含め、排泄の状況が一目で把握できるようチェック表が工夫され、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援につなげている。夜間おむつ使用者は1名、日中は全利用者がトイレでの排泄とのこと。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	個々の排便状況を把握し、便秘にならないように努めている。		
43	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングや健康状態に合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	曜日及び時間の設定はあるものの、本人の状況に応じて行うため、強制はしていない。状況に応じてシャワー浴や清拭及び足浴などで対応する場合もある。	入浴を怖がる方が1名おり、怖がらないよう声掛けを工夫することで、安心していただけるよう配慮している。月、火、金、土の週4日を入浴日とし、臨機応変に対応できるよう心掛けており、最低でも週に2回は入浴出来るよう取り組んでいる。脱衣室は冬場寒くないよう、専用のストーブで対応している。	
44		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の状況に応じた支援を行っている。		
45		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解に努めており、医療関係者の活用や服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の知識や理解に努め、医療機関への情報提供や症状の変化についての確認を行っている。		
46		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人ひとりの状態に合わせた役割や楽しみを支援している。		
47	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	地域カフェ、地域行事への参加や、本人希望の外出などを行っていたが、コロナの影響で現在は外出はあまり行っていない。	本人の希望を把握し、外食や花見、弁当持参で外出等々を実施し、出来るだけ戸外に出かけられるよう支援しているが、新型コロナウイルスの影響で外出が制限されてしまったとのこと。地域を巡回する移動販売車を活用している。	新型コロナウイルスの影響で日常的な外出支援が制限される中、利用者のストレスが溜まらないよう、今後共、アイデアを出し合い、支援するよう期待します。
48		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の所持に関しては、自己責任の範囲内で持参している人もいれば、家族の了解を得て、紛失しても気にならない程の金額を持っている人もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望があれば支援している。		
50	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、臭い、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有の場であるという意識を持っていただき、常に心地よく過ごしていただけるよう、自宅のような雰囲気を作りながら、お互いに配慮しあい過ごしている。	温度計と湿度計を随所に設置することで、快適な共用空間に配慮している。加湿器を使用すると体調不良を訴える方に配慮し、バスタオルを湿らせ湿度を維持するあえて昔ながらの慣れ親しんだ方法を取り入れているとのこと。主に清掃を担当するスタッフを配置し居心地の良い共用空間を維持している。施設長が撮影したプロ顔負けの美しい風景写真が会話のきっかけになる。共有スペースに飾られた能代のべらぼう凧が地域性を感じさせる。	
51		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	横並びのソファや、ダイニングテーブルなどを設置し、利用者間の会話が常に行える環境となっていて、それぞれが思い思いの時間を過ごしている。		
52	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者一人ひとりの生活動線を意識して、家具や日用品の配置を行っている。また、家族に対しても本人とともに居室内を工夫することが可能であることを伝えている。	寝具や家具は利用者持ち込みとし、その人なりの生活が送れるよう居室内を工夫している。自宅での生活同様、暑さ、寒さが感じられるよう居室内にはエアコンを設置しておらず、共用スペースや廊下に設置した暖房器具で暖が取れるようにしているとのこと。	
53		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	その人のできること、分かることに合わせ、個々に環境を工夫し、自立できるよう支援している。		